

2017年1月10日

祖田 修 著作選集 (全8巻)

タイトル・内容

第1巻 都市と農村

2016年9月刊

ドイツの空間整備政策の歴史的展開過程を考察し、そこに流れている“中小都市と農村の結合”という多数核分散型の地域主義的政策理念をめぐりだし、ひるがえって、日本の国土政策、都市・農村関係、ひいては農業・農村政策の現実と方向について考察した。

第2巻 地方産業の近代化構想—前田正名の思想と運動—

明治政府は、地方諸産業の犠牲の上に、都市特権政商による直訳的な移植大工業中心の財閥育成型資本主義化を進めた。前田正名は、それを“虚影の経済”とし、「町村の経済」、地方農工商業の発展を先にすべしと訴えた。その独自の思想と実践の歴史的意味を追究した。

第3巻 農学原論—場の農学へ—

農学は、農村の現実に寄り添い、その総福祉向上に資する使命を持つ。農業には生物の育成という工業と異なる特性があり、それを踏まえた研究や政策が必要である。その特性、追求すべき価値目標、研究方法等を究明し“場の農学”として、その発展方向を示した。

第4巻 コメを考える

日本は、コメを主食とする瑞穂の国として展開してきた。1986年アメリカの輸入自由化要求以降、農業は多難な状況の中にある。市場原理優先と自由貿易論にあえぐ農業・農村について、米を中心に問題の本質を明らかにし、新たな政策の理念と内容を提示する諸論稿。

第5巻 農業・農村政策の展開過程

農業・農村政策は、商工業発展の段階、国際的諸状況を反映しつつ、紆余曲折を経て展開していく。その実態と過程を探り、歴史的意味を考察する。またそこに所在するさまざまな問題点を明らかにし、解決の方向を考え提示する。

第6巻 食・農・環境の現実と展望

現在農業・農村が直面する経営経済問題、過疎化・高齢化等の社会的諸課題、およびそれと連動する食生活をめぐる問題や環境問題を取り上げ、“場の農学”の見地から、今後の解決の方向と展望を探る。

第7巻 着土の思想

現代文明は私たちの物的生活を豊かにし、大きく発展させた。しかし他方で、都市・農村問題、地球温暖化等を抱え、土の香りを忘れ、心のゆとりを失っている。私たちは改めて大地自然に根を下ろす、地に着いた文明・文化再生という視点からの論説、随想を収録。

第8巻 “生涯一村びと” として

私はごくありふれた農家に生まれ、農地改革等の戦後改革、高度成長とその問題、国際化といった経済社会の激動を目の当たりにしてきた。“生涯一村びと”を念じる、誠に非力な一農学徒に過ぎないが、その問題意識と研究の苦闘の跡を、反省とともにたどる。